

ソロー その生き方

新保 哲 著

著者略歴

新保 哲（しんぼ さとる）

1948年 新潟県に生まれる

1972年 独協大学外国語学部英語学科卒

1977年 中央大学大学院文学研究科哲学専攻博士課程終了

現在 姫路独協大学外国語学部専任講師

著書 『日本思想史論』（1980年 大東出版社）

『親鸞—その念仏と恩思想—』（1985年 吉川弘文館）

『道元の時間論』（1985年 雪華社）

『ソローの精神と現代—東西融合論へ向けて—』（1988年
行路社）

『日本思想史』（1989年 晃洋書房）

ソロー その生き方

1989年10月20日 第1刷発行

・検印省略

著者 新保 哲

発行者 登坂 治彦

・定価はカバーに表示

印刷 新灯印刷／製本 小泉製本

発行所 有限会社 北樹出版

〒153 東京都目黒区中目黒1-2-6 電話(03)715-1525(代表)

ISBN4-89384-122-X

(落丁・乱丁の場合はお取り替えます)

ソロー　その生き方

——新保　哲　著——

北樹出版

目次

序	論	七
第一部	ダンとブレイク	
第一章	ダンの宗教観	一三
第二章	ブレイクの宗教観	二三
第三章	ゲーテの『西東詩集』	三一
第二部	ソロー	
第一章	生い立ち	三七
第二章	超越主義運動	四五
第三章	コンコードの歴史と自然と地理	四八
第四章	始祖ピューリタンから新天地開拓・発展期まで	六一
第五章	ソローが成長した時代背景	六八
第六章	古典・経典に関する知的教養	七二

第七章	エジプト及び東方への社会運動熱	八二
第八章	ソローの古代東方人への志向 ——その精神世界をめぐって——	七八
第九章	伝統精神と革新精神	九四
第十章	ピューリタン精神の継承	一〇二
第十一章	ソローとキリスト教	一〇五
第十二章	東西の自然観	一二四
第十三章	美、香り	一二七
第十四章	「眼」を主題としたキリスト教と禅の比較研究	一二五
第十五章	古代インド人の眼	一三二
終章	蘆花とソロー	一四四
第三部	ショーペンハウアーとソローの読書論	
第一章	ショーペンハウアーの読書論	一四八
第二章	ソローの読書論	一六六
第三章	富んだ時代とは何か	一七一
第四章	ソローの大学構想論	一七五

ソロー その生き方

序 論

本書は、イギリスのカトリックの神父であり形而上詩人ダン(John Donne, 1572-1631)、また大胆な自由思想と神秘的な宗教思想が渾然一体化している詩人・画家のブレイク(William Blake, 1757-1827)、さらにドイツの世界的文豪・詩人ゲーテ(Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832)、そしてアメリカの代表的超越主義作家で自然を愛し隠者の体験をもち、社会改革者でもあった個性の強い詩人ソロー(Henry David Thoreau, 1817-1862)にみられる宗教観を中心の問題とする。

とくに問題の焦点を、彼らの著述作品を通して表わされる東洋的思惟指向性、自然観、世界観、人生観、神秘思想、汎神論的思想などについて論考考察を試みてみたい。ソローにおいては、東洋思想に関する多方面の古典、聖典の読書とその影響が意識変革をもたらし、自然や動物との共感、美や香りへのイメージの世界、そしてそれが実践的行動となって極めて顕著に現われている。一方、読書の目的と意義、またそれらを自己の身心・体質に如何に融和させ、行動原理として自家薬籠中のものとなしたかなども、対象課題とする。

つまり簡単にいって、以上の十六世紀から十九世紀の時代内で、イギリスから二名、ドイツから一

名、アメリカから一名をそれぞれ代表者として選択した。彼ら四人の著述に現われた宗教観を、比較思想の立場から論究するところに本論の意図がある。特にソローにおいては、インド思想、中国思想、加えて日本の禅思想者道元や密教の曼陀羅との関連の下で、東西の宗教意識の比較を試みつつも、現代的意義の視点から論を展開した。

いいかえると、正にソローの真理探究の不斷の努力の結実結晶であり、彼は崇高なる自然法則に秘められる真理に則して、しかも世俗の相対的諸現象を第一義とせず、また妥協もせず、ひたすら一筋に自己の理念理想と考える我が道を信じ、人生を前向きに逞しく真摯に生きた。実はその生き方そのものを意味しているわけだ。彼の生き方は彼の単に思惟活動による所産だけでは決してない。もとより非凡な真理を語る勇氣と稀にみる卓越する強靱な意志力と行動力が証明される意味で、ソローの足跡は実に偉大な業績そのものである。

したがって、ソローの名声が知られるようになってから百三十年余り経った現在において、ソローの人間性、生き方に魅力を感じる多くの愛好者がいるばかりではない。彼の言葉は今や狭くなった世界を駆け巡っているといっても過言ではない。その根本原因は、彼が真理探究に身心を挙げて肉迫していった行程そのものに、期せずして自然の山河大地、湖沼、動物、植物、野鳥の保護に通ずる確固たる思想の基盤があったからである。そういった主要因が潜在力となって機械化、人工化、管理化されている現代のわれわれの危機的時代状況に対して、人間と自然の調和共存の声を喚び起こす警笛の

働きを成している。ソローがエマソンと並び併せて同価値に評せられ、コンコードの哲人の一人としてアメリカ国民から熱く尊敬と誇りをもって称賛されるのは、ソローの思想と行動の中に今日の問題の解答案のモデルが見事浮き彫りにされているからだ、と著者は考える。

まず何よりも第一に視点を精神世界の内面にむけ、人間の心の奥へ奥へと沈潜して行き、禅で説く父母未生以前、自己本来の面目をわれわれは探究する試みを生命を掛けてはじめてなければならない。そうすることに依って、宇宙空間における人間の存在価値ならびに目的・使命・責任が自ずから明らかに証されてくるものと言える。すなわちこれを突き詰めて行くと、釈尊が死に臨んで弟子たちに教え諭した「自灯明・法灯明」(自分自身を灯とし、自分自身をよりどころとしなさい。法を灯とし、法をよりどころとしなさい)の文句を想起し、その本源の意味に再び戻って人間の生き方をかみしめることになる。

ソローは著書『ウォールデン』のなかの「孤独」の巻において、「われわれの住んでいるこの地球全体は空間のなかのただの一点にすぎない」(‘This whole earth which we inhabit is but a point in space.’)と叙述している。それは宇宙空間の無限な広がりにおける地球の微小さを言っているが、実はこの微小なる青い地球上には人間や動物、植物をはじめ、ありとあらゆる生命群団がお互い密接な関係をもって、営み合って繁殖・生息しているのである。

さて、眼を転じて振り返ってソローの神秘的思想について考えてみると、それは必ずしも東洋思想

を代表するとか、また東洋の独占的思想であるとは決して断言することができない面が存在する。つまり客観的普遍性を伴った面があるからだ。しかし、欧米の文化の基盤となるキリスト教を西洋思想として位置づけた場合、その国の思想なり宗教、倫理、文化、道徳は本質的に余りにも東洋文化圏のそれと対照的異質的な構造をもっている。そこで西欧の詩人たちの宗教観には、彼らの成長教育過程において厳然としたキリスト教思想文化の長い伝統そして文化的影響が創造的に根強く生きているばかりか、むしろ全体的価値基準がその所におかれている。したがって、そうした文化的背景のある立脚点にたった上での東洋思想への興味・指向・傾倒ならびに強い思想的求心ということではじめて論考可能となると考える。

ところで、ダンやブレイクの詩的感性そのものを問題検討すると、彼らの神観念の内において、たしかに一方では救済宗教としてのキリスト教に期待する信仰が強烈に求められ示される。と同時に、また他方では人格的啓示的宗教から遠く離れて、より抽象化拡大された宇宙的なマクロの世界、さらには逆方向のミクロの極微の小世界に非人格性、神性を見出す思想志向が、幾多の作品群に積極的主体的に強く、憧れにも似て表現されている。それを簡単に言えば、自然の森羅万象の内に、また人間自身の内面に神、天国 (Heaven)、極楽 (Elysium) の世界を見出し、同時にそこにこそ絶対性や永遠性そして安住の地を認めようとする志向が顕著に窺えるのである。

私見に即して言わしめれば、仏教で説く四恩のなかの一つ天地の恩の宗教意識は、具体的には自然

世界の数々の恵みとしてみなされる。たとえば太陽の温かい光線と一体融合化すれば、春の一時の微光の中でまどろみの気分、心がアット・ホームな感情で一杯に充滿してくる。その瞬間、人の罪の自覚は自然消滅し、次に元来人間は性善であるのだという陽気に満ちた、調和統一の快活な心情にもなる。そのように恩恵の自覚とは、宗教的感激にみたされた法悦歡喜、自然への無条件で無償の讃嘆などを指し、いわば血肉からなる身体が心の底から湧き生ずる感覚に包まれる、精神的特殊の現象と密接不離な関係があるのである。

とくにソローの著書『ウォールデン』にみられるように神々を光にたくした一種の宗教的感情・情念の世界は、どこかペルシアのゾロアスター (Zoroaster 拜火教とも呼ぶ) 教の影響を想像させる。キリスト教の聖書と全く反対な宗教組織を持つ世界の諸宗教の中で、聖書と最も密接な関係を持つ宗教はゾロアスター教である。そして一例を示すと、キリスト教の聖書に現われる「パラダイス」「Paradise」という語は、ギリシア語では「パラディソス (Paradisos)」「παράδεισος」であり、少なくとも言語学的には、ゾロアスター教の聖典であるアベスタ語の「パイリダエザ」に相当し、その起原はペルシア語から出ている。

さらには人間と靈魂との神秘的合一をさすグノーシス gnosis (靈的認識、神秘的直感。ギリシア語で知識を意味する) の思想が、ソローの作品の中に窺える。時代を遡れば、その起原はゾロアスター教やマニ (Mani, Manes, Manichaëus, 215-276) によって唱導されたマニ教——これは古代ペルシアのゾロ

アスター教の衰退（一世紀頃）後、ミトラ教（Mithraism, ソロアスター教の直系に属する宗教で、その聖典〈ヘゼンドーアヴェスタ〉にアフラーマツダ（Ahura Mazda, Ormuzd）に直系する重要神格として主神ミトラ（Mithra）があげられている——の母胎ともなっている。このミトラは天空の主宰神としてインド、イラン民族にB・C・三世紀ごろに信奉され、太陽神・光明神・万物豊穡の神として崇拜された。インドーヴェーダ神話のミトスなど、オリエントの古い善・悪二元論的宗教にみられるものに違いない。そして最後に、これまで読書論は古今東西いろいろな賢者・思想家から説かれてきた。そこで本書の第三部においては、とりわけショーペンハワーとソローに限定して取り上げ、幾多の共通する問題点や着眼点を提示するとともに論の展開を試みた。その主なる狙いは、一方はアメリカ、他方はドイツの国籍であり、もとよりその国固有の文化伝統・思想・風土性から生ずる物の見方の視点の相違は顕著にみられる。しかしながら両者は時代性と社会状況からして全く同世代の世界に所属し、ギリシア、ペルシア、インド、中国の聖典も含めた古典的教養に強い興味と関心を示した。ソローにおいては東洋的知識・知恵を徹底して自らの普段の生活の信条指針にまで高め、その崇高なる精神を知行合一し実践したのである。そして彼と東洋の印度仏教思想について造詣が深かった生の哲学者ショーペンハワーとの間には、読書論に関して期せずして共通相同調する思惟形式・見解が多く窺えるのである。

以上のような諸点を問題の中心に据えて論考考察を試みることにする。

第一部 ダンとブレイク

第一章 ダンの宗教観

John Donne (1572-1631) は、英国の生んだ十七世紀初頭における、あらゆる面で最も風変わりな詩人・牧師である。彼の母は、聖トマス・モアやジョン・フステルやジャスパー・ヘイウッドにつながる英国有数のローマン・カトリックの名門出身であった。そしてダン自身は、法律家でもあり牧師でもあった。⁽¹⁾彼は英国国教会の牧師になってからも、終身その宗旨をかえなかった。そして当時彼が危険人物視され、信仰的に迫害されたことは余りにも有名である。

しかし一六一五年一月、聖職に任ぜられてからのダンの生涯は、順風満帆であった。執事から地方牧師へ、そしてロンドンの教区へと、わずか一、二年のうちに昇進したのである。彼は、さらにリンカーンズ・インの説教牧師から、聖ポール寺院の首席司祭に任ぜられ、一世に盛名をはせるようになる。そればかりか彼は国王の寵愛も得るとともに、説教者としての評判もなかなかのものであった。つまり当時のスターだったわけだ。そのような彼の書く詩は、一風変わった独特の宗教詩、わけても

形而上詩 (metaphysical poem) であったことは既に周知の通りである。

では、ダンの描いた詩の世界とは、一体どういう象徴的世界を指すのか。それを探ってみよう。

まずそれに関しては四点考えられる。第一に、ダンのマイクロニズム的思考法。第二に、天上的指向に対する地上的指向の傾向。第三に、超越神よりも内在神を重視する見方。そして第四に、「瞑想」よりも「教化」を目指す。以上のようないくつかの特色を容易に指摘することができる。

ここでダンの詩的想像力の基本的姿勢をもっとも顕著に示す例を挙げてみよう。それには『聖書』のルカ伝第十七章二十一節の箇所が適当であろう。そこでの第一の問題点は、「神の国は、実にあなたがたのただ中にあるのだ」ということと、「……あなたがたの心の中にある」とする二つの解釈である。ギリシア語自体の意味からいけば、後者のほうが自然である。しかしキリスト教の一般的解釈に従うならば、「あなたがたの間に来ているのだ」という意味、つまりイエスの宣教と御業の中に神の国が来たりつつある、という解釈が妥当である。

だが、ダンの恋愛詩 "A Love Poem" などを見ると、そこには歴史とダン独自の世界が存在する。すなわち彼の詩集は、全体的にみて、〈へいへ、絶対的なヘイデアへと向かう衝動を示し、その意味において本質的に宗教的性格を帯びている。しかもその一なるものへの決定的な指向は、彼の内部の強烈な自我渴望を満たすものであり、その方向からいうと、ダンの追求した天国は彼自身の内部にあったとみることができる。

ここで、ダンの詩をあげて、問題点を論考してみたい。

「まずわれわれの²⁰すなわち「われわれ」がある。それはわれわれが神の好意と注目のうちにある証拠である。われわれ、すなわち国民。われわれ、すなわち教会。そこで私は落ちつく。しかし、私自身の個室でも、私は落ちつく。そこで私は、神が私と私の魂のために、なにをなしたもうかを考えるから、そこに²¹、すなわち個、個人、私がある。」〔『説教集』第五卷七一頁〕

この一節をみると、ダンには、公な〈多〉の面と個としての〈一〉の二面が、相互関係を成していることが読み取れる。すなわち〈一〉から〈多〉への移行は、ダン自身の生活状態・態度の変遷と相応していると考えられる。つまり一方で、職業牧師としての名声を鳴らしてきた晩年のダンの立場には、明らかに制度化され社会化されたなかで説教する行動人としての彼の顔がある。さらに他方には、ダン一個人の魂の救いを求める情熱と意識が強烈に生きつづけていた。それを一方が〈多〉であり、他方が〈一〉であるという区別が一応可能であると考察される。したがって、いってみればダンの独自性とは、彼が一即多を矛盾なく一個人のなかに取り入れ包み込んだところにみられる。ただ問題は、その比重にあるわけだ。ともあれ、見方を換えていえば、彼には多様性の宇宙観をもっていたといえよう。さらにダンが、天上の女性を求めるよりも、地上の神を求める傾向が顕著であった事実を、「第二周年追悼詩」にははっきりと読み取れるのである。